

世界のリアルをジブンゴトに！ オンライン×国際協力出前講座

新型コロナウイルスの影響により、様々な変化が教育現場に広がっている今、日本国内でオンライン授業の導入が進められています。オンラインだからこそ、学校での学びや知識を、世界のリアルな話に結びつけていくことができるのでは？ JICAでは、世界のリアルストーリーを「国際協力出前講座」にてお届けしています。今回は、そんな「国際協力出前講座」の魅力に迫るべく、JICA東京の担当者の深林さん、そして他の出前授業に先立ち、オンラインでの出前講座を活用された長野県長野高等学校 竹村ゆかり先生にお話を伺いました。

みなさんは、JICAの「国際協力出前講座」について、耳にしたことはありますか？ JICAの各国内拠点では、開発途上国の実情や日本との関係、国際協力について、JICAボランティア経験者や専門家を講師として派遣する出前講座を、**各地域の学校を中心に、毎年全国で約2,000件実施しており、約20万人が受講しています。**

講師は主に、JICA青年海外協力隊や専門家、開発途上国からの研修員、JICA職員で、**現地での体験から紐づく知識や経験、想い、各国の文化紹介などをお届けしています。**昨今のコロナ禍の状況を踏まえ、これまで対面式で実施していたJICAの「国際協力出前講座」もオンラインでの実施対応が進められています。また、出前講座は希望のテーマや内容、時間に応じて講座を組み立てることができます。詳しくはこちらの[ガイドブック](#)をご覧ください。

初めに、出前授業の魅力や特徴を JICA東京の出前講座担当の深林さんに伺いました。

新型コロナウイルス感染拡大により生じた様々な影響は日本と世界のつながりを再認識する機会になったのではないのでしょうか。

まさに世界で起きることは他人事ではなく私たちと関係があることを身をもって感じている今だからこそ、世界の国々についてもっと知りたいと思いませんか。国際協力出前講座は開発途上国で生活し、その国の課題解決のために活動してきた講師による「生」の声が聞けます。なかなか行くことができない世界の国々のことを是非出前講座を通して身近に感じてみてください。



JICA東京
深林さん



次に、出前講座を利用し、3校合同のオンライン授業を実施した長野県長野高等学校 竹村先生に、授業実施のきっかけや準備、運営、また生徒たちの反応などを伺いました。



長野高等学校
竹村先生

5月に実施された「3校合同オンライン講座」は長野県長野高等学校と長野県上田染谷丘高等学校、埼玉県立浦和高等学校の生徒約150名が参加しました。個性あふれる学校紹介から始まった講座は、各校の教員が趣向を凝らし化学、地理、英語のリレー授業を行い、後半の特別講義に向けて共通の知識と興味を膨らませていきました。特別講義では、JICA在外研究員で北海道大学獣医学部の中田北斗先生に「ザンビアにおける鉛汚染」についてお話いただき、活発な質疑応答が行われました。(レポートはこちら)

Q1: JICAの出前講座をオンライン講座として取り入れようと思ったきっかけは？

2019年度のJICA教師海外研修でザンビアを訪れました。様々な校種・県外からの参加者と共に過ごした研修を通じて、私は日本人であると同時に「長野県民」だという感覚を持ち、「ザンビアでも規模は違えど都市と地方で格差がある。地域格差は日本も同じ課題を持っているじゃないか。」(=国や規模は違えど、身近な場所でも同じ問題は起こっているということ。)と思い至りました。そこから「ザンビアの課題解決について考えることが、なぜ日本の課題を考えることにつながるのか。」という問いと共に、物事の本質を知るためにも比較が重要であることを常に頭に置きながら、長野グローバルプロジェクトに関わるようになりました。しかし、そんな中起きた新型コロナウイルス感染症の拡大による休校。「コロナ禍だからこそ、得られることは無いのか？」とGW中にオンライン授業を検討しました。教師海外研修で出会った教員仲間に相談したことから、オンラインでJICAボランティア事業経験者や専門家の話を聞くオンライン出前授業をやろう！とアイデアが膨らんでいきました。

Q2: このオンライン講座で生徒たちに届けたかったメッセージとは？

このコロナ禍で私自身が感じた「世界で起きていることが、実は身近な足下でも起きていて、繋がっている、ということ。」につきます。中田先生の講義の中にもあった通り、遠く離れたザンビアで生産されている鉛は、実はバッテリーの原料など私たちの身近な生活部品の中にも利用されています。今回の講義を通じてザンビアの鉛問題は私たちの生活にも深く関わっている、ということから世界のつながりに気づいてもらえたらと思います。

Q3: 準備や運営のポイントとは？

参加者には事前に「当日の流れ」「英語論文」「Googleミートの使用方法」に目を通していただいて、利用ツールの使い方のマニュアルだけでなく、当日の流れと事前課題をしっかりと出し、講座に向けての意識付けを丁寧に行いました。また、当日の運営面では、サインインしてくる生徒の承認担当を決めて対応したり、その他のトラブル対応などを同僚の先生方のサポートを得るなど、協力して運営を進めていきました。



Q4: 実際に3校合同オンライン講座を実施しての、気づきや感想は？

オンラインで授業をした気づきの一つは、生徒が輝くチャンスがある！ということでした。司会者や学校代表挨拶、リレー形式の英語の授業のサポート役など、活躍の場があった生徒は達成感を得て自信がついた面もあったようですし、参加者が150名を超えるなか、大勢の前にしても自宅でリラックスした状態で普段とは異なるチャレンジができることもオンライン授業の面白いところなのかもしれないと思いました。講演後の質疑応答では多くの生徒が中田先生に質問するために名乗り出たことも印象的でした。中田先生によると、「コロナで世界が混乱する今、アフリカには日本以上に感染症に対するノウハウを持つ国もある」とのこと。通常の授業だけでは分からないことを知り、世界に対するステレオタイプを崩していく効果もあったように感じています。